

かめられた。また、風向をさらに詳しくみると、真NW、真SEでとはならず傾いており、それを地形の影響から考察すると、その傾き方と、場所による風車の向きの違いが一致した。さらに、同一の場所でもNW風とSE風の傾き方は、対称とはならない。風車の向きはNW風の傾きに一致していることから、設置する際にNW風を優先していたことが考えられる。これは1日を通して類

度は同じでも、NW風のほうが風速が大きいこと、主に昼間に吹き風車の見回りの際に効率がよかったからだと思われる。効率面からすると、特にNW-SE風が卓越する、湖風の影響力が強い場所が風車に適していると考えられ、分布図にもその傾向が見られる。

突風の影響の考察が今後の課題である。

大規模宅地開発にみる「緑」のすり替え

吾郷 かおり

雑木林で覆われていたはずの場所がある日、赤土剥き出しの様相を呈する。そこは後に“緑豊かな街”として生まれ変わる。“緑豊か”の指標はどこにあるのか。

本論文は、1997年3月に街びらきが行われた、東京都八王子市南部に位置する八王子ニュータウンをとり上げ、開発によって奪われた旧来の“緑”と、土木行政が新たに造り出す“緑”との整合性を探るものである。

開発主体である旧住宅・都市整備公団は各種募集案内パンフレットで、緑の豊かさの根拠として「公園緑地」の割合の高さを掲げている。この公園緑地は更に公園、緑地、緑地的施設用地の3種に区別されていることから、このうちまず公園に対してどのくらい“自然”を感じるか等の住民アンケートを行った。

方法は投函葉書の返送によるもので、327通(回収率3割強)の回答を得た。既研究にもある通り全体的に旧住民に比べ新住民の方が満足度は高いという結果が得られた。また、かつての里山を知る旧住民にはそれらの残し方の是非という点で満足度が異なるという意見のほか、転居を後悔しているとの新住民の感想も寄せられた。

そのほか、上記アンケートの中で紹介を受けた、

旧住民を中心として1991年からニュータウン内に唯一残された緑地の保全活動を行っている『宇津貫(うつぬき)みどりの会』で参与観察を行った。ここでは緑地および緑地的施設用地について聞き取り等を行った。公団が謳う“緑の環境軸”など形成されるとは思えないなど、緑地の造られ方に対する好意的な意見はほとんどなかった。

また、みどりの会での拝借資料等からは、住民説明の場における開発側の「公園緑地」と「公園」の混同使用、「公園緑地“等”」、ゴルフ練習場さえ含まれる「緑地的施設」などに衣われる、曖昧な言葉の使用が垣間見られた。

各種文献からは、土木の世界では「二次林=既に人為の加わっているところ」として当たり前のように開発の対象となるという概念がまかり通っているなど、広義での都市計画や緑地計画においても“緑”の定義が不十分なものとなっていることが明らかになった。

様々な価値観を有する人々あるいは組織の中で、言葉の定義の共有が図られないまま進められる開発の危うさを感じるとともに、今後、元の緑をやっかいものとして捉えるのではなく、“宝”としてみる目が行政の側にも養われていくことが望まれる。

高齢者福祉施設におけるボランティア活動： 板橋区特別養護老人ホームみどりの苑を事例として

上村明子